



駐日ポーランド共和国大使館 + シアターX

能形式による戯曲（詩劇） 2012年3月5日（月）18：00～ シアターX（カイ）

新作能「鎮魂」^{ちんこん} ふくしま および ホロコースト—犠牲者追悼の夕べ プレリユード—



ちんこん 新作能「鎮魂」 朗読会を鑑賞して

霜田千代磨

去る3月5日午後6時より、東京の両国に在る「劇場シアターX」に於いて、駐日ポーランド共和国大使館の主催による「ふくしま および ホロコースト—犠牲者追悼の夕べ」がおこなわれた。当日はヤドヴィガ・ロドヴィッチ-チェホフスカ=写真右上=の新作能「鎮魂」の台本の朗読会であった。

第一作品は国立能楽堂で上演された「調律師-シヨパンの能」(POLE 第69号10ページ掲載)であった。今回は、2013年上演のためのプレリユードとして「鎮魂」の朗読だけであったが、日本語(関口時正訳)、ポーランド語(原作)、英語の順序で少しずつ進行した。東日本大震災で犠牲になった福島の少年の霊とポーランドのアウシュビッツ収容所で殺されたポーランドの少年の霊が前シテ、後シテとなっている。

戯曲の朗読というものは、観客としては、理解するのはなかなか困難さを伴うものである。ト書から役名(登場人物名)をいちいち繰り返される事は、本筋の理解を助けるどころか、筋の理解を追うだけで疲れてしまう。それが、3カ国の繰り返しとなると尚さらの事であった。し

かし、面白い発見もあった。言語の持つ音楽的ひびきの違いには、ことさらに興味深いものがあった。

英語は川の上層の流れを聞くが如く、ポーランド語は中間の流れを聞くが如く、日本語の「遅速強弱」は川底の流れを聞くが如きおもむきがあった。当たり前のことながら、能の戯曲は能舞台に於いて、地謡(じうたい)や笛、大鼓(おおかわ)、小鼓(こづつみ)の鳴物が入って、はじめて完結する事を自分自身確認した次第である。日本の古典演劇としての「能形式」のすごさも再確認した。

日本語(古語)のかたいセリフ廻しと単調な流れを、随時藤田六郎兵衛師の笛(能管)の調べが助けていた事も大きかった。音楽は世界共通である。

終演後、ロビーで会ったロジャー・パルバース(東京工業大学世界文明センター長)とも「良かった、よかった」と成功を喜び合った。それは日本人でも難解な能戯曲を二作も書き上げた、イガ・ロドヴィッチ女史に対する讃嘆の気持ちからであった。2013年度の能楽堂の開演が今から待ち遠しい気持ちで劇場を後にした。副会長(しもだ・ちよまる)

＜第62回例会＞ポーランド文学朗読会

“ポエジアの夕べ”で「鎮魂」を朗読予定。

6月16日(土)午後2時から

クラーク会館 3F

お問い合わせ：FAX 0126-56-2969 (霜田)

《 緊急予告！ 》

シヨパンへの
芸術的オマージュ

2012 5月29日(火)

19：30～

シアターX(カイ)

チケット千円

新作能「調律師」による詩の朗読とワルシャワ公演のドキュメンタリー映像の調べ。 ピアノ：霜田陽子

北海道新聞(夕刊)2012.4.2から転載

時評
文芸

沼野充義

大震災からはや一年。文芸関係でもこの一年を振り返った特集企画が目立つ。《中略》新作能「鎮魂」の朗読形式による上演(関口時正訳)を東京シアターX(カイ)で観たときも、そんな思いを深くした。作者は駐日ポーランド大使で、能の研究者でもあるヤドヴィガ・ロドヴィッチエホフスカ。これは息子を大津波にさらわれた福島の日本人と、ホロコーストの犠牲者の霊魂がアウシュビッツで出会うという設定の驚くべき作品である。

今月の文芸誌を見ても、大震災そのものを扱った作品よりも、それ以前の過去から現在を照らし出すといった趣の作品が目についた。(以下略)

(ぬまの・みつよし)東大文学部教授